



『儒教社会と母性』

—母性の威力の観点でみる漢魏晋中国女性史—

著者 下見隆雄

写真 下見隆雄
(文学部教授)



母と父

日本は母性社会であるといわれる。また母親への思慕の情は、特別の扱いを受け、「母の愛」には、すべての混乱や騒擾をも平静に回帰せしめる崇高なちからが潜むとさえ信じられる。母なるものの観念が、なぜこのように独特の位置づけを得てきたのか、さまざまに分析が試みられている。しかし、まだ儒教思想との関連に言及する研究はない。

一方、最近の日本社会の諸事象に関する論で、父の権威は失墜したという指摘が有る。従来の研究者は、儒教社会は男尊女卑に立脚し、徹底した父性原理で構築されると考えてきた。儒教家族制をとり入れたわが国においても、父性に根ざす家父長の権限は絶大だったとされるから、男女同権が認定され、社会経済の変転によって家族制が機能しなくなつた現今の社会で、父の権威が消えたと思われるのは当然かも知れない。

しかし、この社会で、母性に対して実質的に自立して絶対的主導の権限を施行する父性の存在を析出できるだろうか。このところをじっくり検証してみる必要がある。

孝と母性と儒教

歴史や思想史は男性が主導したとするのが、いわば従来の学問的常識であった。中国学でも、女性存在が直接の学問研究対象とされることはなかった。

筆者は、十数年来、歴史や思想史の推移に目を配りつつ、中国の『列女伝』などの女性伝記資料や種々の女性教導関係資料の分析・整理による研究を続け、儒教社会における女性(母や妻や娘)の存在意義や役割について考察してきた。そして、親への服従奉仕を本

質とする孝の観念の育成に、母(母性)が重要な役割を果たすことをつきとめた。

孝は、儒教倫理の核をなす実践道徳理念である。母を抜きにしてこの孝が成り立たぬなら、母という存在を無視して儒教を説明することはできない。女性と歴史・思想史、ことに儒教思想との関係、これを結ぶ視点が設定できたのである。本書は、この研究に関する成果を内容とする。

要点を整理する。儒教社会における母は、母性による慈愛・保護を通して、まず子のところに親への信頼・依存・親愛の情を形成する。さらに、この母性の威力に依拠して、厳しい管理・教訓指導を加え、子に親への服従奉仕たる孝観念を教導・構築する。孝を習得した子は、成人して妻を迎えて家長となる。妻は、母の母性をさらに発展的に展開して夫に施行する。貞節と女卑従順の姿勢で夫を支援して、男尊の自覚を持たせ独断専行を許容し、かれを家族制における主導責任者に定め置き、家と親への孝たる服従奉仕と公への忠義実践をうながし導く。また、父と娘の間にもほぼ類似の関係が存在する。

孝(忠)観念は、母性によって養成されるのであり、それは、子や夫や父において、個の権利主張を抑圧して、家や一族・血縁(また公の権力)のために奉仕する精神として機能するのである。

父性の本質

男尊女卑については、次のような仮説をたてた。

男尊は、本来、男性自身が母性からの意識的主体的自立という積極的努力を通して築き上げ確立した自覚ではなく、自らを卑下して退いて支える女性の女卑の配慮や姿勢(母性

の支援や保護)によって、いわば誘導された幻想である。

この社会における男性存在は、基本的に母性に依存するのが実態であり、本質的に自立するとはいえない。父性が専行する絶対的権限は、いわば皮相の形質であり、その実質部分には、実は母性に淵源する素因が充満する。母性が父性を牽引しているのだ。

現代的課題と儒教

以上のような視点に立つと、忠孝による社会の構築を企図した儒教型社会である殊に近世の日本で、なぜ母なるものへの特殊の扱いが必要とされたのか、その理由の一端が明らかになる。

また、現代の教育課題である過保護や子の親からの精神的自立、家庭や夫婦関係などの諸問題はおおむね、意外にもなお儒教の人間観となんらかの関わりを持っている。旧来の儒教諸理念からはすっかり脱却したと思いつているわれわれは、もう一度、自分の精神構造を見すえ、謙虚に分析してみなければならぬ。

(A5判 四六九頁)

一一五〇〇円 研文出版

プロフィール

(しもみ・たかお)

◆一九三七年生まれ

◆一九六九年広島大学大学院博士課程後

期単位取得退学

◆一九九六年文学博士(広島大学)

◆所属||文学部中国古代中世思想史講座

◆専門分野||漢魏晋思想史・中国女性史

学女性学

儒教社会と母性

下見隆雄著